

平成 27 年度 川での経験調査 結果報告 (大台町内小学校)

1. 趣旨

平成 26 年度より「宮川流域における伝統漁法の調査記録及び継承のための環境教育」と題して、宮川流域に残る伝統漁法とその継承のための事業に取り組んでいる。本調査は次世代に貴重な河川文化を継承するため、子どもたちの川での経験の現状を把握し、今後の取組への参考とするための調査である。

2. 概要

平成 26 年度より町内小学生を対象に川での経験の現状を把握するための調査を行っている。
2 年目の今年は町内全小学生を対象にして調査を行った。

調査名称	川の経験についてのアンケート		
調査対象	大台町 4 小学校 1～6 年生	425 名	回収率 98%
調査実施	平成 28 年 2 月		
調査方法	各学年毎に 10 分程度の時間を一斉にとり、各自アンケートに記入する		
調査用紙	<u>平成 27 年度川の経験についてのアンケート</u>		

3. アンケート結果

(1) 学校別・男女別・学年別割合

(2) 結果

質問1:今年の夏、川(谷川などの小さな川も含む)へ行った経験(学校の授業以外)

質問2(夏期川へ行った人のみ回答):川へ行く時、一緒に出かけた人

質問3(夏期川へ行った人のみ回答):川での遊び(複数回答)

質問4:伝統漁法“しゃくり”の認知

質問5(しゃくりを知っている人のみ回答):伝統漁法“しゃくり”の経験

質問6(しゃくりを経験した人のみ回答):伝統漁法“しゃくり”の経験回数

質問7(しゃくりを経験した人のみ回答):伝統漁法“しゃくり”を経験した機会

質問8(しゃくりを経験した人のみ回答):伝統漁法“しゃくり”を教えてくれた人

(3) 考察

以上

(1) 学校別・男女別・学年別割合

宮川小学校の学区では漁業者が多く、伝統文化等が豊富に残っている。三瀬谷小学校学区は三瀬谷ダム周辺部に位置しており、本流へのアクセスは限られている。川添小学校、日進小学校は宮川中流域に位置しており川魚漁業者がいるが、三瀬谷ダムの影響で水質や河川環境は悪い。児童数では三瀬谷小学校が43%と最も多く、次いで宮川小学校、日進小学校、川添小学校である。男女は概ね半々であった(表1、図1、表2、図2参照)。

学校別割合

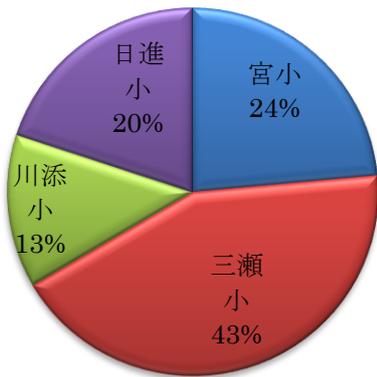


図1 学校別割合割合

男女別割合

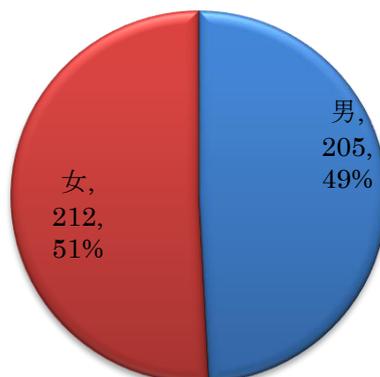


図2 男女別割合

学年別割合

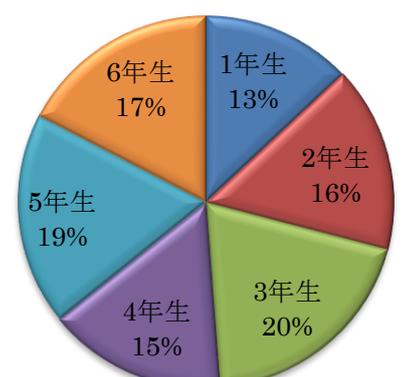


図3 学年別割合

表1 児童数

	宮川小学校	三瀬谷小学校	川添小学校	日進小学校	合計
1年生	14	24	6	10	54
2年生	15	22	10	20	67
3年生	21	38	11	13	83
4年生	15	30	9	10	64
5年生	14	36	13	14	77
6年生	19	29	8	16	72
合計	98	179	57	83	417

表2 男女割合

	男子	女子	合計
宮川	54	44	98
三瀬谷	91	88	179
川添	19	38	56
日進小学校	41	42	83
合計	205	212	417

質問1：今年の夏、川（谷川などの小さな川も含む）へ行った経験（学校の授業以外）

■76%の児童が夏期に川へ行ったと回答した。そのうち週1回以上と頻繁に川に行く割合は28%、月に1～2回以下とめったに川に行かない割合は47%であった。また川へ行かなかった児童も24%存在し、月に2回以下と回答しためったに川に行かない児童を合わせると71%になった（図4、表3参照）。

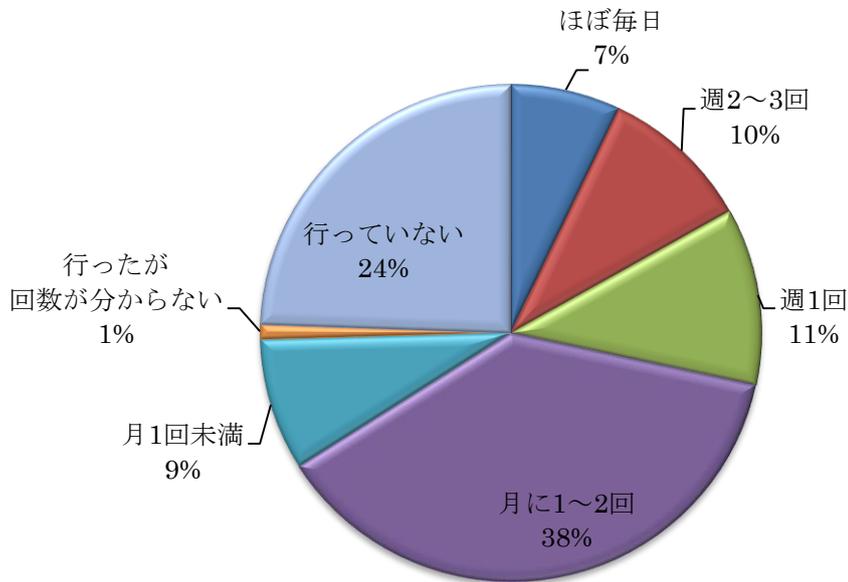


図4 今年の夏川へ行った経験

表3 今年の夏川へ行った経験

川での経験（人数）	行った回数（人数）
ほぼ毎日行った	29
週2-3回行った	40
週1回	47
月に1-2回	154
月1回未満	35
分からない	4
行っていない	100

質問2（夏期川へ行った人のみ回答）：川へ行く時、一緒に出かける人

■父親と母親が一番多く、両者合わせると4割以上。また祖父母と親戚を含めると6割以上になった。家族に連れて行ってくれる人がいることが、川に行ける最も良い条件である。学校では大人と一緒に川に行くというルールはあるが、友だちや兄弟姉妹と一緒に川に行くケースも約2割確認した（図5、表4参照）。

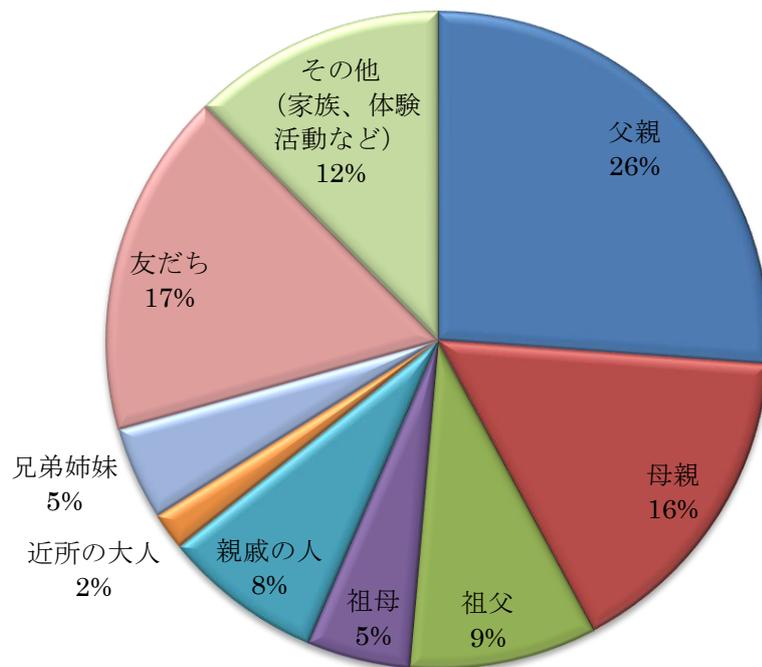


図5 川に行く時、一緒に出掛ける人

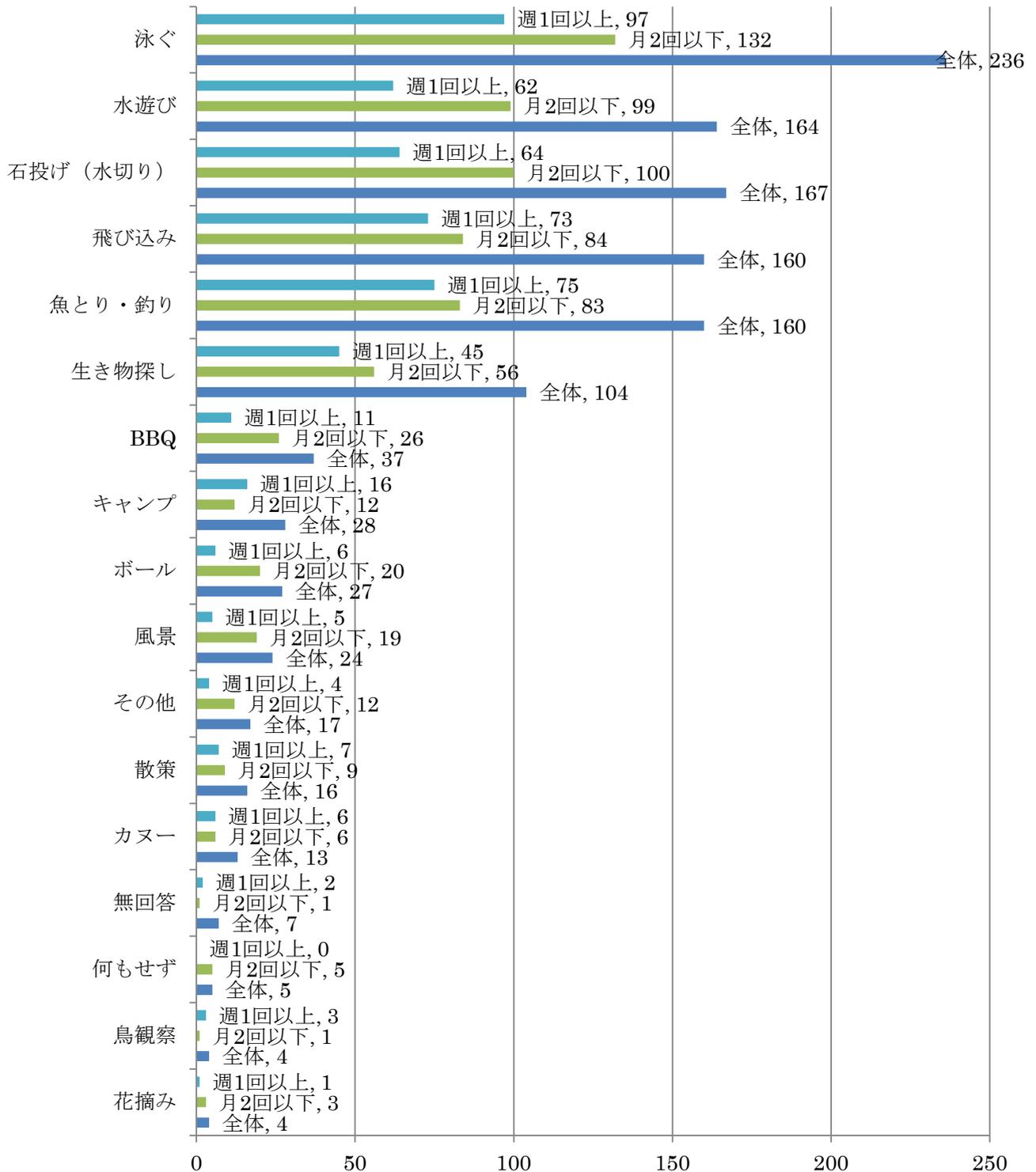
表4 川に行く時、一緒に出掛ける人

手段	人数
父親	57
母親	35
祖父	20
祖母	11
親戚の人	17
近所の大人	4
兄弟姉妹	10
友だち	37
その他(家族、体験活動など)	27

質問3（夏期川へ行った人のみ回答）：川での遊び（複数回答）

■川での遊びは泳ぐ、水遊び、石投げ(水切り)、飛び込み、魚とり・釣り等の川との触れ合いがある遊びが上位を占めた。頻繁に川へ行く(週1回以上)児童とあまり川に行かない(月に2回以下)児童を比較し、川へ行く頻度による遊びの種類を分析したが大きな差は見られなかった(表5参照)。

表5 川での遊び



質問4：伝統漁法“しゃくり”の認知

■しゃくりを知っていると回答した児童は5割を占めた(図6参照)。特に宮川小学校の認知度が高いが、これは授業時間内での取り組みが3年生で行われていたためである(図7参照)。

質問5 (しゃくりを知っている人のみ回答)：伝統漁法“しゃくり”の経験

■しゃくりを知っている人の半数以上が経験をした事があると回答した(図6参照)。川添小学校は4校のうち認知度も経験値も低いですが、これは川での体験が取り入れにくい環境のためである(図7参照)。

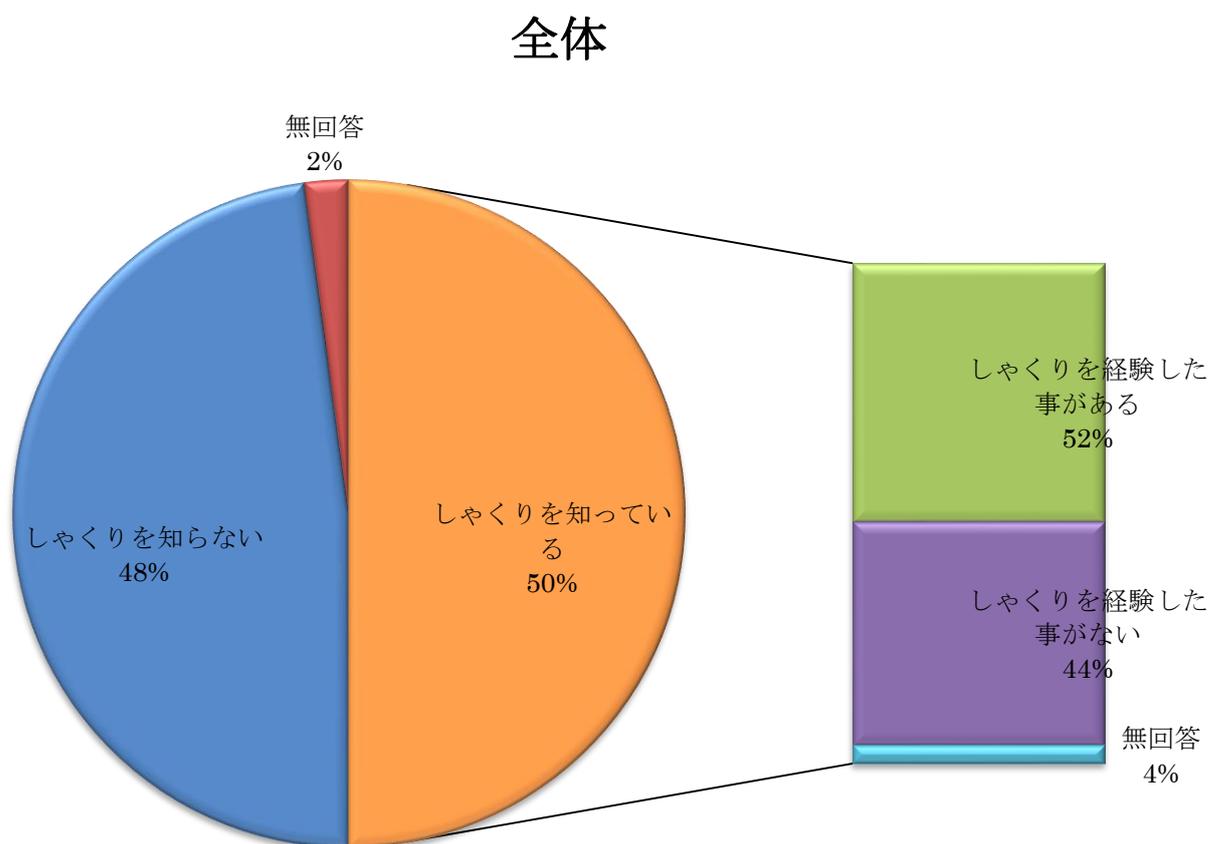


図6 しゃくりの認知・経験

■しゃくりの認知と経験を学校ごとに見てみると、一級河川宮川にアクセス可能な宮川小学校と他3校の割合に大きな差があった(図7参照)。

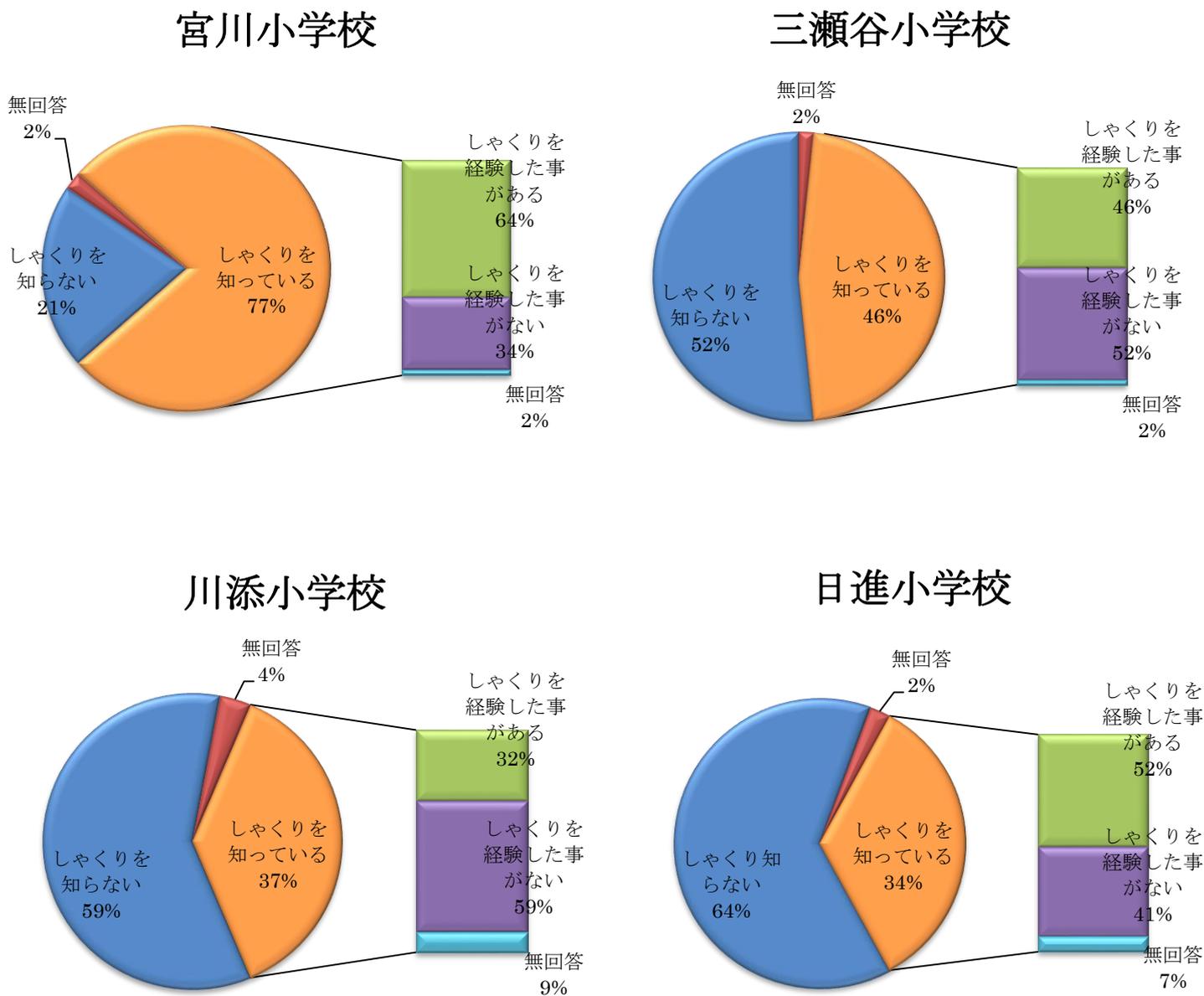


図7 学校別しゃくりの認知・経験

質問6（しゃくりを経験した人のみ回答 109）：伝統漁法“しゃくり”の経験回数

■しゃくりを経験した事があると回答した人は、1回が最も多く5割近くになった。しゃくり1回の内訳は、休みの日、大人と、イベントや行事、学校の授業などがあげられた。学校の授業で取り組んだのは宮川小学校のみである。約11回以上と回答した児童はしゃくりを頻繁にしており、伝統漁法を継承していると推測される(図8参照)。

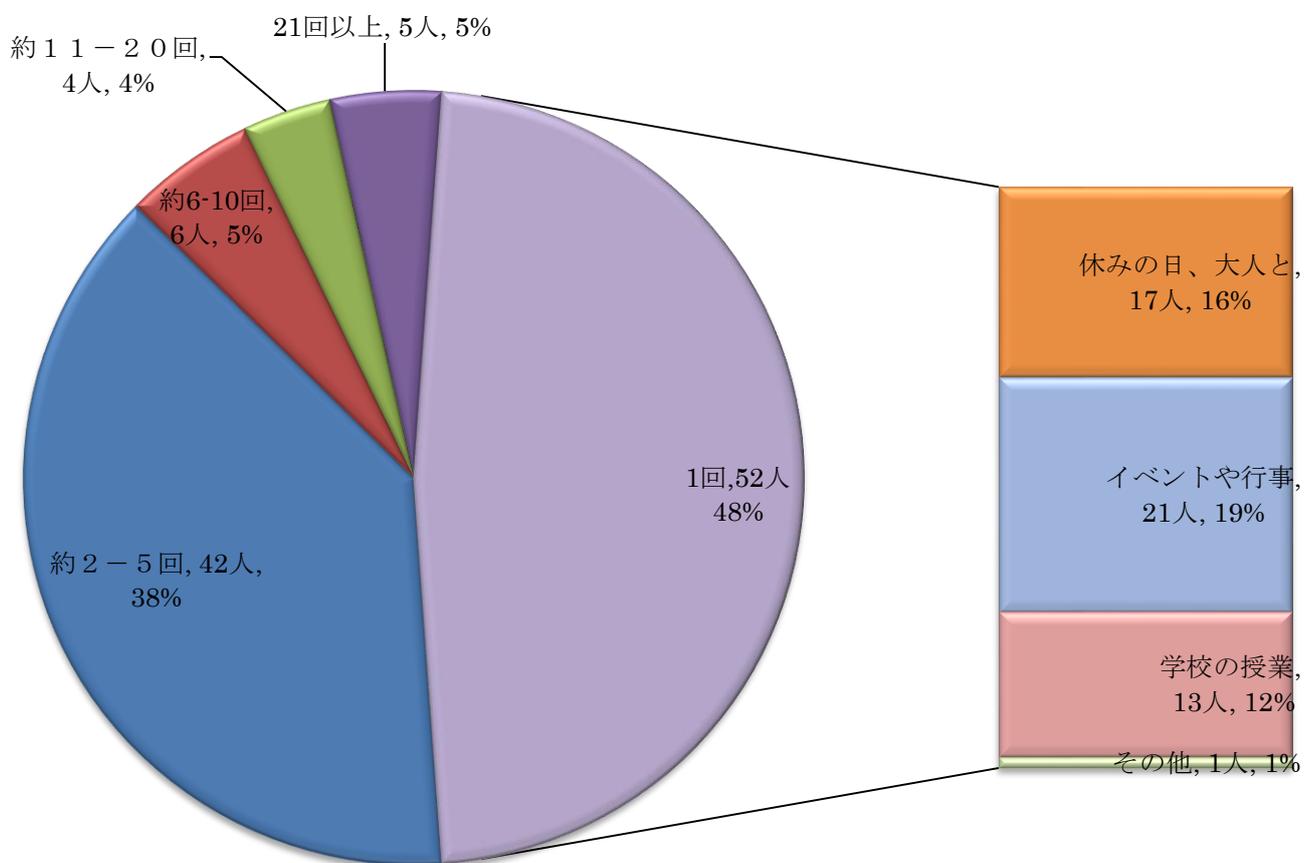


図8 しゃくりの経験回数

質問7（しゃくりを経験した人のみ回答 109）：伝統漁法“しゃくり”を経験した機会

■一番多い回答は休みの日、大人とであった。次いで多い回答は「イベントや行事」となった。「学校の授業」、「イベントや行事」と回答した人は5割を占めた。一番多い回答である「休みの日、大人と」の内訳は、1回と約2～5回という経験数が比較的少ない回答が多かった(図9参照)。

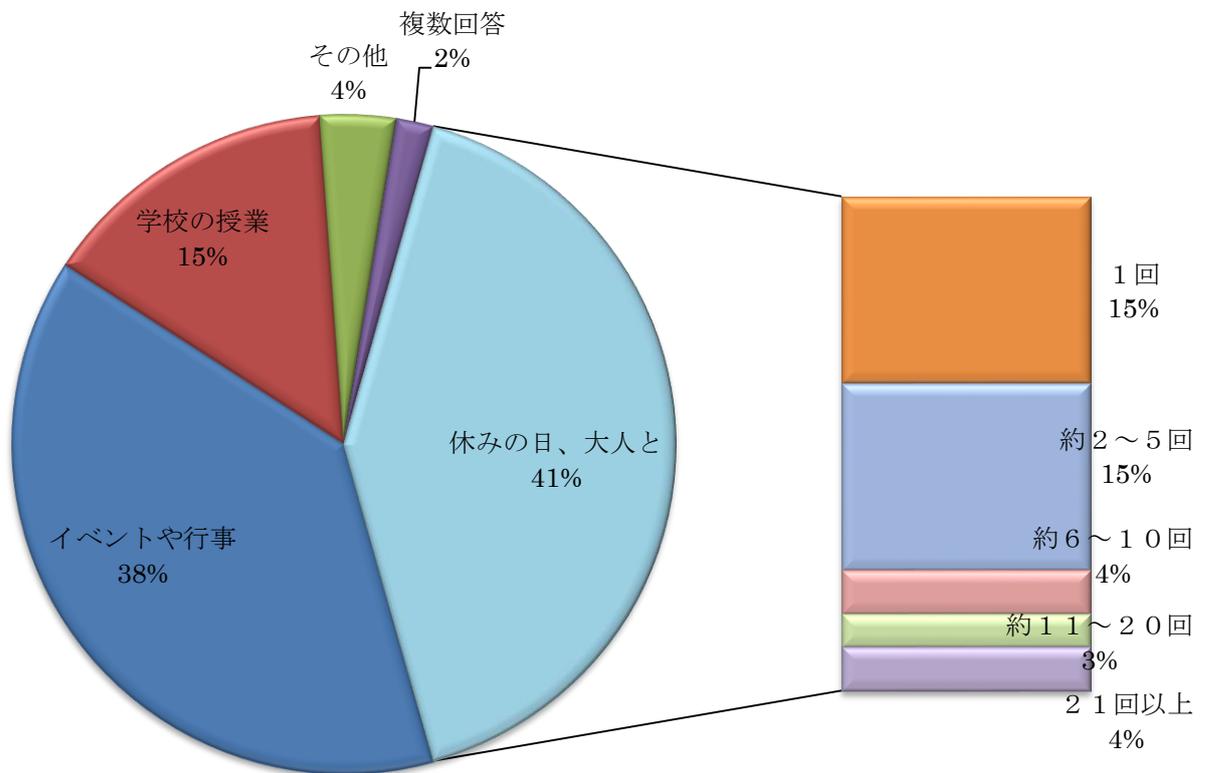


図9 しゃくりを経験した機会

質問8（しゃくりを経験した人のみ回答 109）：伝統漁法“しゃくり”を教えてくれた人

■先生や自然学校の指導者が約半数を占めた。次いで多いのが父親で、約四分の一を占めた。授業や体験イベントで習う以外では、父親や祖父が主立って伝統漁法の継承を行っている(図10参照)。

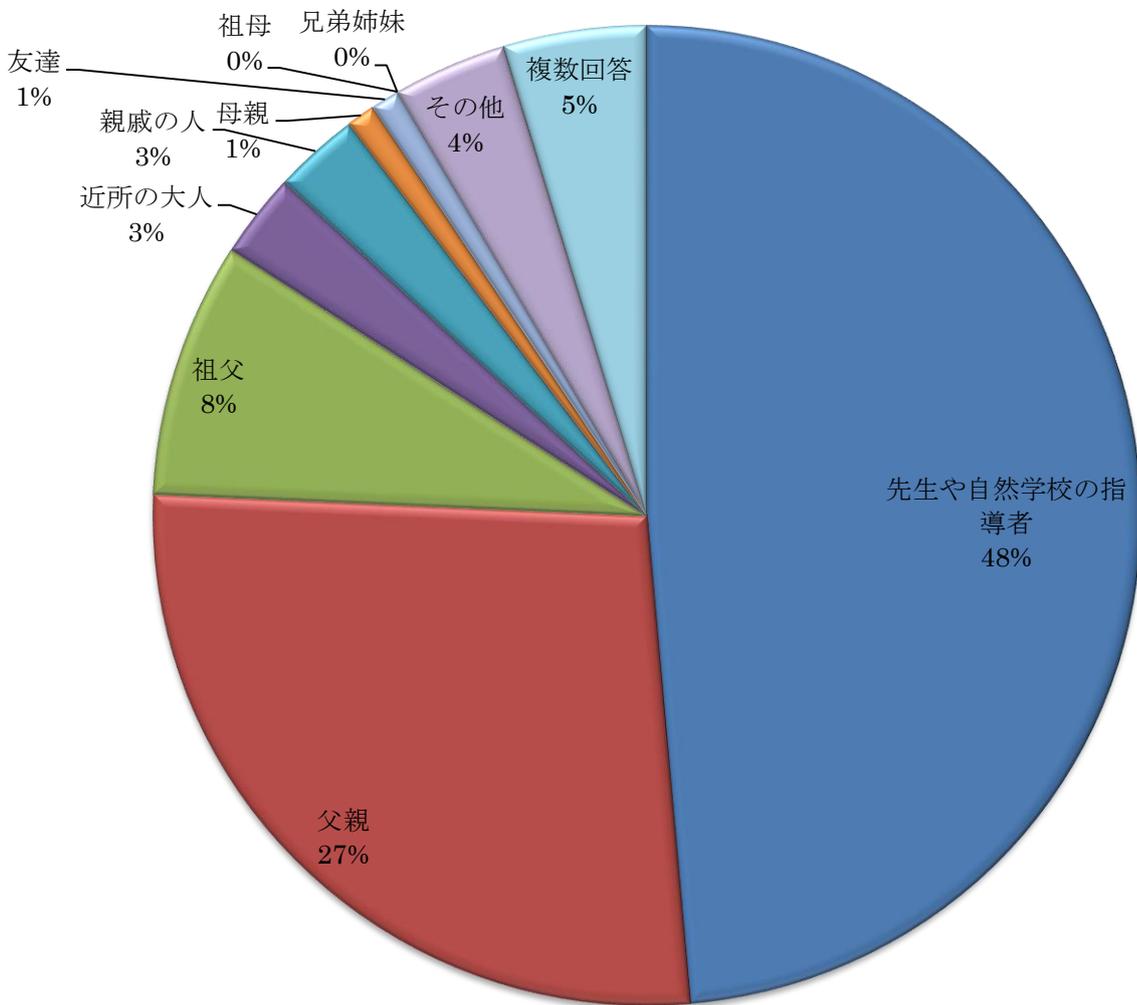


図10 しゃくりを教えてくれた人

(3) 考察

前年度は町内 3 小学校の小学 5 年生を対象として調査を実施したが調査範囲は限定的であった。よって、今年度は、町内全 4 小学校全児童 425 名を対象に調査を実施した。低学年児童も対象となったため、複雑な設問ができず、設問数の減少と簡易化を実施した。そのため、川の経験値と伝統漁法しゃくり漁法に主眼を置いた調査内容となった。

① 川の経験値について

大台町全児童のうち約76%が昨夏川に行った経験があった。この割合は、当校に町外から訪れる児童の川の経験値と比較すると、非常に高いといえる。大台町内を東西に流れる一級河川宮川は、国土交通省の調査で日本一水質の美しい川として選ばれるほどの清流であり、大台町を代表する自然環境であること、また、宮川両岸に民家が集中しており、町内のどの場所からでも川が望める環境にあることが、川に行く機会を極めて高くしているといえる。

ところが、川へ行った頻度を検証すると、月 2 回以内と答えた児童が 48%であった。月 2 回以内という頻度は、現在 60 代以上の河川文化を継承してきた毎日川にでかけていた世代と比較すると、ほとんど川に出かけていないとみなせる程度の頻度である。また、まったく川に出かけなかった児童も 24%おり、よって川にほとんど出かけなかったとみなせる児童は 76%も存在したことになる。河川環境に恵まれている大台町全体の環境から考えると、大台町小学生の川での経験値は低いといえる。

② 伝統漁法しゃくりの認知度と継承度について

伝統漁法しゃくりの認知度を調べたところ 50%がしゃくりを知っていると回答した。うち、実際にしゃくりをした経験のある児童は全児童数の約 25%であり、しゃくり経験回数は 1 回が最も多く 45%であった。

宮川小学校では学校の授業で伝統漁法しゃくり体験を取り入れており、他の 3 小学校と比較しても、宮川小学校だけは、認知度が高かった。よって、しゃくりの認知度を上げるには授業等体験の機会を提供することが効果的であることがわかった。

ただ、しゃくり漁の継承という観点から見ると、継承に十分な回数の体験を有しているとみなせる児童数は、経験回数が 11 回以上と回答した児童が 9 名だけで、全体の 2%にとどまっている。また、この 9 名は父や祖父とともに川に行ったと回答しており、伝統漁法が男系の家族により継承されていると推測できる。

③ 伝統漁法しゃくりの入り口としての体験活動の在り方について

授業や行事等の体験活動により、認知度は上昇するが、あくまでしゃくり漁への入り口でしかない。継承まで発展していくためには、現状の体験活動では不十分である。川で 11 回以上頻繁にしゃくりを体験するには、男系の家族の介在が必要不可欠であるが、児童の父世代には、既に伝統漁法を継承していない人も多く、昔のような継承スタイルを期待することはできない。よって体験活動を、入り口だけに留まらず、継承の仕組みとして発展させる方法を検討するべきである。